

『正法眼藏聞書抄』 口語訳の試み

—— 行持(三) ——

伊 藤 秀 憲

無上ノ行持アリ、道環^{クワシ}シテ断絶^{クツ}セスト
アリ、是ハ我等為イカナルヘキソ、シハ
ラクノ間隙^{キキウ}アラス、行持道環^{クワシ}ト云ヲ、
仏祖ノ上ハカリト、ヨソニ思事如何、虚
空蔵菩薩ノヨニ出ヲハシマシ、トキハ、
山モ(二〇b)樹モサハリナクスキテ見
へ、海慧菩薩ノ時ハ世界海トコソミエシ
カ、仏成道ノ時ハ大地有情同時成道ト
被^レ仰、初祖航海シテ伝法救迷情ノ大慈
ヨリナレル行持^カノ時刻、我等カ行持ヲ隔
ヘカラス、善悪苦楽ノ相違アリトモ、必
虚空蔵海慧菩薩ノ時ノ如クナルヘシ、是
等ヲハ正境^カユツリテ我等カ行持ハ不^カ叶

〔第一段(一)〕
「無上の行持あり、道環して断絶せず」とある。これは我々にとつてどのよう
であろうか。「しばらくの間隙あらず、行持道環なり」とあるのを、仏祖の上
〔のこと〕にすぎないと、他人のことのように思うことはどうか。虚空蔵菩薩が
世にお出になつた時は、山も樹も妨げなく透き通つて見え、海慧菩薩の時は、世
界が海と見えたのか。仏成道の時は、大地有情同時成道と仰しやつた。初祖〔達
磨大師〕が航海して法を伝え、迷える有情を救わんとの大慈から生じた行持の時
点と、「我等が行持」を隔ててはいけない。「行持に」善悪苦楽の相違があつたと
しても、必ず虚空蔵〔菩薩〕、海慧菩薩の時のようであろう。これらを聖者の境
界にゆづつて、「我等が行持」はかなわなるとは、決して言つてはいけない。得道
の時、もし行の効果があるようならば、教行の時というのも、証を教え行じるの
と同じであろう。吾我を始末しないのに、証の時であろう。

『正法眼藏聞書抄』 口語訳の試み (伊藤)

トハ努く云ヘカラス、得道ノトキ功アルヘクハ、教行ノ時ト云モ、証ヲコソラシヘ、行スレハヲナシカルヘシ、吾我ヲ沙汰セネハ、証時ナルヘシ、

教行ヲ行持ト思、世間ノ習、教ハ口業ノ説教ノ（二一a）程ハ、只詞ニテ開演スト思、コノ業ハ親切ナラス、説得一丈行取一尺セムニハシカスト云、但説モ不尽ナリ、行モ不尽ナリ、説与行不染汚、口ハ説黙、身ハ行、意ノ止観ハ念也、口ナル時節ハ、大地虚空皆口ナリ、遍覆三千世界広長舌ナリ、眼睛ヲトク時、只眼睛ノ出没トナラフ、口業ト云ニハ、頂顛ノ説法モ、眼睛ノ説法モ、口業ト云ヒツヘシ、今ノ行持ノ行ハ、行仏ノ行ニ習ヘシ、教行証一ナルユヘニ、
無上ノ行持アリト云ハ、此無上諸界ニワタル、無上ハ仏、最下ハ地獄、仍仏道ヲ無上道トモ、無等々（二一b）トモ云フ、但コレ対下タル心地ナラハ非本意、此無上ハ不対下上也、又此無上ニ

教行を行持と思うのは、世間の常である。教は、言語的行為（口業）である説教の段階は、ただ言葉によって教えを説き明かすことと思う。この行為は「行持とは」ぴったり一つではない。「第十七段に大慈寰中禅師のことばとして」「説得一丈、不如行取一尺」（二丈を説得せんよりは、一尺を行取せんに如かず）とある。ただし、「説よりも行の方が勝っているようであるがそうではなく」説も尽きることもなく、行も尽きることがなく、説と行とは不染汚である。口は説黙、身は行、意の止観は念である。口である時は、大地虚空皆口である。「遍覆三千世界広長舌」である。眼睛を説くときは、ただ眼睛の出没と習う。口業という時には、頂顛の説法も、眼睛の説法も、口業と言うであろう。今の行持の行は、行仏の行と学ぶべきである。教行証は一つであるから。

「無上の行持あり」と言うのは、この無上は諸界にわたる。無上は仏（界）、最下は地獄（界）である。よって、仏道を無上道（この上なくすぐれた道）とも、無等等（ならばものがないほどすぐれている）とも言う。ただし、下に対しての意味合いならば本意ではない。この無上は下に対しない上である。またこの無上には下もないのである。ただし、上がないから、下はなおないと思われる。そうで

ハ下モナキ、但上ナカラムカラニ、下
ハナヲナキソト覚ユ、然而権実ノ教超越
シヌル無上、法華ノ時ノ無上ハ、十方
仏土中唯一乗法ナルユヘニ上下ナシ、
教行証ナル証ハ無^二上下^一、教行ニマタ
ル、証ニハナヲ有^レ下、

抑権教ノ上ニハ実教アリトモ、実教ノ上
ニハ上アルマシ、実教ニハ又無下ノ徳ア
リ、上ハナクトモ下ハアリヌヘシト云
ハ、疎学ナルヘシ、

道環^{（二）}シテ断絶セスト云ハ、教行証一ナ
ル道理ヲ（二二a）道環ト云ヘシ、到^{（三）}
菩提^{（二）}証ハ、船イカタモ不^レ入、発心修行
皆道環、発心ノ時修行ノ時ト不^二各別^一
ヲ道環ト云ヘシ、

過去現在未来ノ諸仏ノ行持ニヨリテ、過
去現在未来ノ諸仏ハ現成スルニトハ、コ
レ七仏ノ法道ハ七仏ノ法道ノ如シト云シ
詞ニテ可^レ心^二得三世^一ナリ、

発心修行菩提涅槃シハラクノ間隙アラ

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

あるから、権実の教を超越した無上である。法華の時の無上は「十方仏土中、唯
有一乘法」^③（十方の仏土の中には、唯一乗の法のみ有り）であるから上下がない。教
行証（が一つ）である（と説かれる）証は上下がない。教行によつて待たれる証
にはなお下があるのである。

「そもそも、たとえ権教の上には実教があつても、実教の上には当然上はない。
実教にはまた「権教を融会して権教ではなくしてしまう」無下の徳がある。上は
ないとしても下はあるにちがいないというのは、学に疎いからであろう。

「道環して断絶せず」というのは、教行証が一つである道理を道環と言うべき
である。菩提に到る証は、船筏も必要とし^④ない。発心・修行（・菩提・涅槃）皆
道環である。発心の時、修行の時（など）と分け^⑤ないのを道環と言うべきである。

（第一段⑦）

「過去・現在・未来の諸仏の行持によりて、過去・現在・未来の諸仏は現成す
るなり」とは、「諸悪莫作」の巻の「七仏の法道は七仏の法道のごとし」とい
う言葉で三世を理解すべきである。

（第一段①）

「発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず」とは、発心・修行・菩

ストハ、発心修行菩提涅槃ノ様ヲシラス、或四季春夏等ニタトフ、或方角東西南北ニタトフル事アリ、初発心時便成覚ト心得ヘシ（二二b）常ニハ初発心時トイフ、四種ノ次第不經四種、仏ミ重ミトモ心得ル様、相統ノ無間トハ心得ヘカラス、四種カ同品ニテ無間隙キリナリ、

修シテ証スト云モノ、因果ニ墮在スト云、但因ニマタサル果ナラムトキハ、更因果ニ墮在スヘカラス、大乘因者諸法実相、大乘果者諸法実相也ト云、又空華乱墜ノ定ニ心得ヘシ、

ワレヲ保任シ、他ヲ保任スト云フ、此行持ノ功德カ非自非他ナリ、一地ニ所生ノ物、一雨ソ、ク道理此定トハ不可三心得、蒙功德トハ、天地カヤカテ其功德ナル（二三a）ハ、大地有情同時成道コレナリ、十方ノ匝地漫天、ソノ功德ヲカウフルト云、他モシラス、ワレモシラスト雖トモ、シカアルト云ユヘニ、

仏非ト云ハ、非心非仏ノ仏非、諸法コ

提・涅槃がどのようなものであるかを知らないで、或いは四季（春夏秋冬）等にたとえ、或いは方角（東西南北）にたとえることがある。「初発心時便成正覚」（初めて菩提心を発した時即座にさとりを完成する）と理解すべきである（いつも初発心時という）。「発心・修行・菩提・涅槃の」四種のならばは四種を（順に）経ない。仏が幾重にも重なっているとも理解する趣である。絶え間なく続いていいるとは理解してはいけない。四種が同じで間隙（すきま）がないのである。

修行して証すという者は、因果に墮在する（墮る）という。ただし、因に待たない果である時は、決して因果に墮るはずがない。「大乘因者諸法実相也、大乘果者諸法実相也」と言う。また、「空華乱墜」のように理解すべきである。

（第一段（3））

「われを保任し、他を保任す」とある。この行持の功德が非自非他（自にあらざ、他にあらざ）である。「一地に所生の物、一雨そそぐ」道理はこの通りであるとは理解してはいけない。「功德をこうぶる」とは、天地がそのままその功德であるのである。「大地有情同時成道」がこれ（行持の功德）である。「十方の匝地漫天、（みな）その功德をこうぶる」とあり、「他もしらず、われもしらずといへども、しかあるなり」とあるのであるから。

（第一段（5））

「仏非」と言うのは、「非心非仏」の「仏非」である。諸法が特に収まらない

トニヲサマラスト云事ナシ、仏住仏心仏成シテ、断絶セサルべト云フ、此外ニ仏行トモ、仏坐トモ、仏臥トモ、仏身トモ、仏口仏鼻仏足トモ云ハムカ如シ、ユヘニ諸法ヲサマラスト云事ナキ、

日月星辰、大地虚空、行持ニヨリテ有ト云、日来ノ心地ニハ相違スヘシ、(二三)

b)

発心修行ス、ソノ功德、トキニアラハレズ、カルカユヘニ見聞覚知セスト云フ、発心修行ハユルシテ、又見聞覚知セスト云、発心ノ詞モ取捨アルヘシ、見聞ノ詞モ取捨アルヘシ、

イカナル縁起ノ諸法アリテ行持スルト不会ナルハ、行持ノ会取、サラニ新条ノ特地ニアラサルべト云フ、コノ会新条ニアラスト云フ、古シト云ヒアタラシト云ハ、吾我ニ対シタル事、

縁起ハ行持、行持ハ縁起セサルカユヘ

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

ということはない。「仏住(し、仏非し)、仏心(し)、仏成して、断絶せざるなり」とある。このほかに、仏行とも、仏坐とも、仏臥とも、仏身とも、仏口、仏鼻、仏足とも言うようなものである。だから、諸法が取まらないということはないのである。

〈第一段(6)〉

「日月星辰」「大地虚空」が「行持によりて」「あり」とある。日頃の考えには相違するであろう。

〈第一段(8)〉

「発心・修行す。その功德、ときにあらはれず、かるがゆえに見聞・覚知せず」とある。「発心・修行」は認めて、また「見聞・覚知せず」とある。「発心・修行」は取り、「見聞・覚知」は捨てているが、「発心(・修行)」の言葉も取捨あるべきである。「また」「見聞(・覚知)」の言葉も取捨あるべきである。

「いかなる縁起の諸法ありて行持すると不会なるは、行持の会取、さらに新条の特地にあらざる(によりて)なり」とある。この「会」は「新条にあらざ」とある。古いと言ひ、新しいと言ひのは、吾我に對したことである。

〈第一段(9)〉

「縁起は行持なり、行持は縁起せざるがゆえに」と言うのは、縁起と行持が

ニト云ハ、縁起行持親切ナル儀ナリ、
(二四 a)

今ノ行持ノ様、衆生アリテ仏道ヲ行持ス
ルソトノミ心得ハ不_ニ審細_{シムサイナラ}、衆生ハ行持
ニ行持セラシ、ト可_ニ心得、先師ノ御詞
ニ、コノ行持ノ功德、ワレヲ保任シ、他
ヲ保任ス、ソノ宗旨ハ、ワカ行持、スナ
ハチ匝地漫天、ミナソノ功德ヲカウフ
ル、他モシラス、ワレモ不知ト云ヘト
モ、シカアルナリ、諸仏諸祖ノ行持ニヨ
リテ、ワレヲカ行持現成ストアリ、

縁起トアレハ、縁カヲコルニヨリテ行持
スルソトイフヘカラス、行持コソ縁起ナ
レ、縁ハコレ照ナリ、不對縁而照ノ照ト
心得ヘシ、(二四 b)

他国踰跼ト云ハ、所詮醉中ニモ、衣ノ裏
ニ珠ハアリシカ如ク、サシヤクモ行持ト
云、真父法財ナヲ失誤スルト云ハ、
世間ニ思如クウシナイアヤマルニテハナ
シ、真父ノ珠、衣裏ニ懸ナリ、他国踰跼

びつたり一つであることである。

今の行持の様は、衆生がいて仏道を行持するとのみ理解するのは詳らかではない。衆生は行持に行持させられると理解すべきである。先師の御言葉に、
〔この行持の功德、われを保任し、他を保任す。その宗旨は、わが行持、すなはち〔十方の〕匝地漫天、みな功德をかうぶる、他もしらず、われもしらずといへども、しかあるなり。〔このゆえに〕諸仏諸祖の行持によりて、われらが行持現成する〕とある。

〔「縁起」とあるので、縁が起るることによって行持すると言つてはいけない。行持が縁起である。縁は照である。〕不對縁而照⁹⁾の照と理解すべきである。

〔第一段¹³⁾〕

〔「他国踰跼」と言うのは、結局、醉中にも衣の内に珠はあったように、〕「さしおくも行持」というのである。「真父の法財なを失誤するなり¹¹⁾」というのは、世間で思うように、失い誤ることではない。真父の珠は衣の内に繋けるのである。¹²⁾
他国踰跼の時機は、三乗の教えを学んだころである。

ノ時刻ハ、三乗ノ教ヲ学セシ間也、

慈父大師釈迦牟尼の段、

大地有情同時成道ノ行持アリト云ハ、行持ハ成道以前時刻トコソ聞ユレ、十九歳已後三十成道已前ナルヘキ行持ヲ、成道行持ト云事ハ、教行証ヲ三ニタテサルイハレナリ、(二五a)

〔第二段〕

慈父大師釈迦牟尼の段。

「大地有情同時成道の行持あり」とあるのは、「普通、」行持は成道以前の時点と受け取られる。十九歳「で出家して」以後三十歳で成道する以前であるはずの行持を、「(ここでは)」「成道の行持」といつていることは、教行(行持)証(成道)を三つ「異なるもののように」に立てない理由である。

一「時一日モ独処スル事ナシト云ハ、仏道ニハ独処林間寂靜地ニ居スヘシトイフ、而今ノ義尤參差トキコユ、タ、シ仏ノ本意ハ、一切衆生ヲ化度セムト思食ス、化ニ一切衆生皆令レ入ニ仏道ニ、ユヘニ成道シヌレハ、一時モ不レ可ニ独処ニ、仏独処ノ時刻アラハ、衆生ノタメ無ニ依古ニ、独ハ縁覚乗ノ用義也、

一「閑供養ヲ辞セスト云フ、不レ辞供養ニシテ好ムハ、近來ノ僧ニ似タリ、但イタツラナル供養ヲ不レ辞ハ、不レ貪心也、

「二時一日も独処することなし」と言うのは、仏道では、独処して林間の寂靜地に居るべきであると言う。そうであるのに、今の道理は、全く一致していないと受け取られる。ただし、仏の本意は、一切衆生を導き救おうとお思いになり、「一切衆生を導いて」皆仏道に入らさせるのである。ゆえに、成道してしまえば、一時も独処すべきではない。もし仏が独処する時があるならば、衆生にとつてよるべきものがないのである。独は縁覚(独覚)乗が用いる道理である。

「閑供養を辞せず」とある。供養を辞退しないで好むのは、近ごろの僧に似ている。ただし、「仏が、自らは」必要としない供養(閑供養)を辞退しないのは、「供養を貪る近頃の僧とは異なり、」貪らない気持ちである。

〔第三段〕

第八祖迦葉尊者の段。

第八祖迦葉尊者の段、

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

十二頭陀コトナル行持ナルヘシ、此十二頭陀ノ内、第四（二五b）ニハ止宿樹下ニスルヲトリ、第十一ニハ不在^{ツラシク}樹下^{ツラシク}屋宿^{ツラシク}ト、ル、前後相違シテ聞ユ、但天竺ニハ国大ナルユヘニ、樹モ如^{ツラシク}屋舎ナルモアルヘシ、此事ヲカサネテ云歟、

第十祖波栗濕縛尊者段、

生カ、生ニアラサルカト云フ、コノ生ヲ世間ノ如クニ不可^レ思道理ヲ被^レ述、マツ老少ト不可^レ思、山河大地ミナ行持ナル上ハ、行持ニヲモフクニテコソアレ、趣^{ツラシク}ヌル上ハ、マシテ歳ノ老ソ少ソト云論ニモ不及^ク、又辨道ノナカニテコソ、生死ハスレ、生死ノ上ニテ今辨（二六a）道スルニハアラサレハ、生カ生ニアラストモイハル、ナリ、

雲巖無住大師石頭孫、薬山弘道大師弟子

道悟石頭弟子、号天皇子

百丈大智禪師、

馬祖ノ侍者トアリシヨリ、入寂ニイタル

「十二頭陀」は別々の行持であろう。この十二頭陀の内、第四には「野田の中の」樹下に止宿するを採り、第十一には「樹下・屋宿に在らず」と採る。前後が相違していると受け取られる。ただし、インドでは、国が大きいから、樹も屋舎のようであるものもあるであろう。このことを重ねて言うのか。

（第四段）

第十祖波栗濕縛尊者の段。

「生か、生にあらざるか」とある。この生を世間のように思つてはならない道理を述べられたのである。先ず、老少（老か、老にあらざるか）と思つてはならない。山河大地みな行持であるからには、行持に赴くのである。赴いた上は、言うまでもなく、歳が老いている、若いという論にも至らないのである。また、「弁道」の中で「生死」する。「生死」の上で今「弁道」するのではないので、「生か、生にあらざるか」とも言われるのである。

（第七段）

雲巖無住大師（石頭の孫、薬山弘道大師の弟子）

道吾（石頭の弟子、天皇子と号す）

（第九段）

百丈大智禪師。

「馬祖の侍者としてありしより、入寂（のゆうべ）にいたるまで、一日も為衆

マテ、一日モ為レ衆為レ人勤仕ナキ日アラ
ス、一日不作一日不食ノアトヲノコス、

三平山義忠禪師、

天厨送食ス、大顛ヲ見テ後ニ、天神、師
ヲミス、是等則仏法ノ証驗、ソノユヘ
ハ、イマノ人ニモ（二六b）外道ノ法ヲ
行シテ、魔ノ道ニヨリテ不思議ノ事ヲ現
セハ信仰スヘシ、マサシク仏道ヲ行シテ
人情ニシタカハスハ、人は是ヲ不レ可レ貴、
三峯庵ニ住セシトキノ行ハ、天コレヲタ
トフト云ヘトモ、伝法ノ後ハ境界ヲ離
ル、

後大瀧和尚云、

我二十年在瀧山、喫瀧山飯、○終日露
回回、タトヒ参瀧山道スル人アリトモ、
不参瀧山道ノ行持ハマレナルヘシトイフ
ハ、是ハ師弟ノ位ヲナシクナリヌル上
ハ、参不参ト云ヘカラス、参瀧山道ノ
（二七a）人アリトモ、不参瀧山道ノ後
大瀧ノ行持ハマサルヘシトモ、牧得ト云
詞カ共通スルナリ、親切ノ事也、タトヘ

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

為人の勤仕なき日あらず。「かたじけなく」一日不作、一日不食のあとをのこす」。

（第十一段）

三平山義忠禪師。

「天厨送食す。大顛をみてのちに、天神、「また」師を」みない。これらはす
なわち仏法（を伝えたこと）のあかしである。そのわけは、今の人でも、外道の
法を行じて、魔の道によって不思議なることを現すと信仰するであろう。正しく
仏道を行じて人情に従わないならば、人はこれを貴ばないであろう。「第八段、
雲居山弘覚大師が」「三峯庵に住せしとき」の行は、天がこれを貴ぶと言うけれ
ども、伝法の後は（天とは）境界を離れる。

（第十二段）

後大瀧和尚いはく、

「我二十年在瀧山、喫瀧山飯、……終日露回回」。「たとひ参瀧山道する人ありと
も、不参瀧山道の行持はまれなるべし」というのは、これは、師弟の位が同じに
なったからには、参不参というべきでない。「参瀧山道」の「人ありとも、不参
瀧山道」の後大瀧（和尚）の「行持は」「それよりも」勝っているはずである
のである。「瀧山の行持と後大瀧の行持とは」「牧得」という言葉が共通す
るのである。「二人の行持が」ぴったり一つであることである。たとえば一拳の
拳頭（こぶし）を牧い得た（牧得）というようなものである。「水枯牛」は、特に

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

ハ一拳ノ拳頭ヲカイエタリト云ハムカ如シ、水枯牛ハ別無其詮、只今ノ詞ニチナミテイテキタル也、

趙州真際大師、

或旋転ト云ハ、不定置典座、衆各相営義ナリ、

（第十三段）

〳趙州真際大師。

「或旋転」というのは、前もつて典座を決めておかないで、大衆が各々互いに営むと言う意味である。

（第十四段）

〳大梅山法常禪師。

大梅山絶頂ニ昇テ、人倫ニ不群ナリ、草庵ニ（二七b）独居ス、松実ヲ食シ、荷葉ヲ著ス、坐禪辨道三十余年、不知年曆、坐禪ノトキ八寸ノ铁塔ヲ頂上ニ置ク、塔ヲ落地セシメサラムト功夫スレハ、不被眠、不随人請、ツイニ猶山奥ヘ入、云、師云、這老漢、人ヲ惑乱スル事、了期アルヘカラスト云ハ、此惑乱、凡夫外道ノ惑乱ニハアラス、即心是仏ヲ非心非仏ト惑乱スルナリ、

「大梅山の絶頂にのぼりて、人倫に不群なり。草庵に独居す。松実を食し、荷葉を」著る。「坐禪弁道〔すること〕三十余年」。「年曆」を知らない。「坐禪」のとき、「八寸の铁塔」を「頂上におく」。塔を地に落とさないようにしようと修行に精進するので、眠ることができないのである。人の請にしたがわず、とうとう、更に山奥へ入る……。 「師いはく、這老漢、ひとを惑乱すること、了期あるべからず」というのは、この「惑乱」（まだわしみだす）は、凡夫外道の惑乱ではない。「即心是仏」を「非心非仏」と惑乱するのである。

（第十五段）

〳五祖山の法演禪師。

〳五祖山法演禪師、

太白山宏智禪師正覚和尚、

大隱ハカシテ小隱ト云ハ、俗典ニハ大隱ハカシテニ朝市カタルシラニ、小隱ニ山谷ニ（二八 a）人不知知、云々、只大小ト仕許々、無別儀、ステニアルヲハナル、ナキヲモハナルヘシト云ハ、名利アルヲハ、ナルヘシトヲシフ、ナキヲハイカニハナルヘキソト覚タレトモ、アルモノヨリモ、コトニナキモノコソ、ネカヒイトナミアラマストキニ、コ、ヲハナレヨト云々、

（第十六段）

太白山宏智禪師正覚和尚。

「大隱・小隱」というのは、仏書以外の書物には「大隱ハカシテ朝市、小隱ハカシテ山谷、人不知……」（大隱は朝市に隠れ、小隱は山谷に隠る、人知らず……）とある。ただ大小とつかうにすぎないのである。格別のことではない。「すでにあるをはなる、なきをはなるべし」というのは、名利があるのを離れるべきであると教える。ないのをどのように離れるべきかと思われたけれども、あるものよりも、特にないものを、望み努め期待するときに、ここを離れよと言うのである。

（第十七段）

説得一丈不如行取一尺、説得一尺不如行取一寸、是ハ時人ノ行持ヲロソカニシテ、仏道ノ通達ヲワスレタルカ如クナルヲイマシムルニ似トモ、一丈ノ説ハ不是トニハアラス、一尺ノ行ハ一丈ノ説ヨリモ大功ナルト云々トイフハ、説不離行、証不離行、皮肉（二八 b）骨髓ヲ四人ノ得法ニアツルニ、髓ヲマサルト、ル事不レ可レ然々、夕、教行証ノ如シ、此説行ハ只同ト心得ヲ、教家モ

「説得一丈不如行取一尺、説得一尺不如行取一寸」（一丈を説得せんよりは、一尺を行取せんに如かず、一尺を説得せんよりは、一寸を行取せんに如かず）。「これは、時人の行持おろそかにして、仏道の通達をわすれたるがごとくなるをいましむるに（たりといへ）ども、一丈の説は不是にはあらず、一尺の行は一丈の説よりも大功なるといふなり」というのは、説は行を離れず、証は行を離れない（ことである）。皮肉骨髓を四人の得法に当てるときに、「二祖となつた慧可が得た」髓を勝つていふことは適當ではない。全く教行証（が同じであること）のよう（に皮肉骨髓も同じ）である。この説行はただ同じと理解するのを、教家或いは世間では、（行とは）別に説を立てるけれども行しない。（行は）損気無益など

シハ世間ニハ、別ニ立_三于説_二而不_レ行、損氣無益ナムト云、不_レ可_レ然事_二、又説理者多、行理者少ナムトモ云フ、是等ハ皆各別ノ法ト立ル_レ、証行タカヒニ功アルヘキナリ、

多聞ヲス、メ、多聞ヲ嫌事コレアリ、經云、譬如貧窮人日夜數_三他宝、自無半錢分_一、多聞亦如_レ是、是キラフ心_二、タ、キク事ヲノミコノミテ、仏道ノ始終ヲアキラメサルトカナリ、（二九 a）若欲_レ求_三仏道、常隨_二多聞人_一、善知識者、是大因縁、所謂化導令_レ得_三見仏_一、是ハトルカタナリ、一尺ノ行ハ一丈ノ説ヨリ大功_二ト云ハ、コレモ行ヲマサリタリト云心地ス、然而仏法ニハ、仏コトニスクレタリトハトケトモ、此仏ハ劣_二ト、ク事ナキカ如ク、大功_二トハ云_レ、説ヲ小功トイタスニハアラス、又丈尺ニヨラサル所ヲ、ヤカテ大功ト仕_二フイハレアルヘシ、

という。そうではあるはずがないことである。また、理を説く者は多く、理を行じる者は少ないなどとも言ふ。これらは皆「説と行とを」各々別のものとして立てるのである。「そうであるから」証行たがいに功德があるはずである。

「多聞をすすめ、多聞を斥けることがある。『華嚴』經に言っている。「譬如貧窮人日夜數他宝、自無半錢分、多聞亦如是」¹⁵（譬は貧窮人の日夜に他宝を数うるが如し、自らは半錢分も無し、多聞も亦是の如し）。これは「多聞を」斥ける意図である。ただ聞くことだけ好んで、仏道のすべてを明らかにしないあやまちである。

「若欲求仏道、常隨多聞人、善知識者、是大因縁、所謂化導令得見仏」¹⁶（もし仏道を求めんと欲せば、常に多聞人に随ふべし、善知識は、是れ大因縁、いわゆる化導して見仏を得せしむ）。これは「多聞を」採る方である。「一尺の行は一丈の説よりも大功なり」というのは、これも行は勝っているという感じがする。そうではあるが、仏法では、仏が殊に優れているとは説くけれども、この仏は劣っていると言ふことがないように、「大功なり」と言うのである。説を小功とするのではない。また丈尺によらないところを、そのまま大功と使う理由があるはずである。

「三業は身口意（の三業）」である。とはいふものの各々にしないことは、我に對して身口意は各々別のものと思われる。無我のとき、尽十方「界」一隻眼とも、尽十方界家常語とも言うときは、「尽十方界が一隻眼であり、家常語であつ

モ、尽十方界家常語トモ云時ハ、身ノ
(二九b) 外ニ口ヲノコシ、口ノ外ニ意
ヲ、ク事ナキカ如ク、説行モアルヘシ、

非^三自為道^二自為道^一ト云ハ、タトヘハ法
華經ハ三世ノ諸仏ノ説トハ云ヘトモ、又
釈迦出世シテ解^レ之、此心ナルヘシ、又
三世ノ諸仏ニ釈迦モルヘカラス、

洞山悟本大師道ニハ、説^二取行不得底^一、
行^二取説不得底^一、云^レ行不得底ノ説取ナルカ^レ
得底ノ行取ナルカ^レ、此不得ハ得ナリ、タト
ヘハ會不会ト仕カ如シ、又過去心ヲトク
トキモ、現在心ヲトクトキモ、未來心ヲ
トクトキモ、皆不可得ト、ク程ノ事、
(三〇a)

雲居山弘覺大師道ニハ、説時無^二行路^一、
行時無^二説路^一、云^レ諸法ノトキ実相ノ道
ナシ、実相ノトキ諸法ノ道ナシ、諸法^レ
ニナリト、ク程ノ事、

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

て、他になにもないように)身の他に口を残し、口の他に意を置くことがないよ
うに、説と行も〔そのように〕あるはずである。

「〔いまの道得は、囊中の〕自為道にあらず。〔囊中の〕自為道なり」と言うの
は、たとえば、『法華經』は三世諸仏の説と云うけれども、また釈迦がこの世に
出てこれを説き明かした。この意味であろう。また三世諸仏に釈迦が漏れるはず
がない。

〔第十八段〕

「洞山悟本大師道」には、「説取行不得底、行取説不得底」(行不得底を説取し、
説不得底を行取す)とある(行じることができないところを説くのであるから、説くこと
ができないのである。説くことができないところを行じるのであるから、行じることがで
きないのである)。この不得は得である。たとえば、會・不会と使うようなもので
ある。また、過去心を説くときも、現在心を説くときも、未來心を説くときも、
皆不可得と説くほどのことである。

〔第十九段〕

「雲居山弘覺大師」の「道(ことば)」には、「説時無行路、行時無説路」(説時
には行路無く、行時には説路無し)とある。「諸法実相において」諸法のとき実相の
ことばはない。実相のとき諸法のことばはない。諸法は諸法であると説くほどの
ことである。

説行ノ道理ヲケツ囊中ノハシメテ云ニハア
ラス、此理ニコソ囊中ハイハルレト云程
ノキレ、ユヘニイマノ道得ハ、囊中ノ自
為道ニアラストハ云フ、然而又イヒニハ
イフ所ヲカヘシテ、囊中ノ自為道キタウト云
フ、

南嶽大慧禪師、

曹谿ニ参シテ、執侍スルコト十五秋、
伝道授業ス、寒炉ニ炭スミナク、涼夜ニ燭シヨウ
ナシ、(三〇b)此ノ十五年ト云ハ、説
似一物即不中トサトリシ已前八年、已後
又八年、然者二八十六年ナレトモ、サ
トラサリシ終ノ年ト、悟ノ始ノ年トヲ一
年ニトレハ、十五秋ト云ハル、

唐宣宗皇帝、

不著レ仏求、不著レ法求、不著レ僧
求、長老用レ礼何為、○コノ問答ハ其ヲ
其ト云、清浄本然云何忽生山河大地ト

〔第十七段〕

「説行の道理を（大慈）囊中がはじめて言うのではない。この理によって囊中は言われるというほどの意味である。ゆえに「いまの道得は、囊中の自為道にあらず」とある。それにもかかわらず、また意味としては「あらず」と言うところを改めて、「囊中の自為道なり」と言う。

〔第二十段〕

南嶽大慧禪師。

「曹谿に参じて、執侍すること十五秋（なり。しかうして）伝道授業す。」「寒炉に炭なく、（ひとり虚堂にふせり。）」涼夜に燭な（く、ひとり明窓に坐する。」。この十五年というのは「説似一物即不中」と悟った以前の八年と、以後の八年である。そうであるならば、二八、十六年であるけれども、「まだ」悟っていないかかった終わりの年と、悟った始めの年とを一年にとれば、「十五秋」と言われるのである。

〔第二十三段〕

唐宣宗皇帝。

「不著仏求、不著法求、不著僧求、長老用礼何為。……」（仏に著いて求めず、法に著いて求めず、僧に著いて求めず、長老、礼を用って何か為ん。……）。「この礼拝は、求めるところがない礼拝であるから」この問答は、それをそれ（常に礼することは是

云程ノ問答ナリ、^{タイ}太^ソ麤^{サム}生、是ハ一掌ス
ルヲ不委、ハナハタアラシト云々、

雪峯山真覺大師、(三二a)
コノ昏味ハ得道已前ノ時刻、^{コソ}劄^リ利ハ得道
ノ後ナルヘシ、

行持 下

真丹初祖菩提達磨和尚、
梁武帝与^{フツサク}初祖^{フツサク}問答、具^{フツサク}二^{フツサク}草子、
来時好道去如来時ト云フコトハアリ、是
ハ舍那多尊者、依^{シヤク}阿育大王請、勤^ニ
唱^シ道^ノ之時、只此一句許ヲ云テ下座、
諸人不^ニ心得、只大王独随喜スト、云々、
此心ハヨカリシ道ヨリ生^{シテ}来^{シテ}今大

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

の事の如し) というのである。(長水子瞻の)「清浄本然、云何忽生山河大地」(清
浄本然ならんに、云何んが忽ちに山河大地を生ずるや) (という間に、¹⁹ 瑯琊慧覺が「清
浄本然、云何忽生山河大地」と答えた) というほどの問答である。「太麤生」、こ
れは「黄檗が」「二掌」するのを(その意味を書記は) 知らず、はなはだ乱暴だ
というのである。

〈第二十四段〉

雪峰山真覺大師。

「この「昏味」は得道以前の時刻、「伶俐」は得道以後であろう。

行持 下

〈第二十五段〉

真丹初祖菩提達磨和尚。

「梁武帝と初祖との問答は草子に詳しい。

「来時好道、去如来時」(来る時は好き道、去るも来る時の如し) という言葉があ
る。これは舍那多尊者が、阿育大王の請によつて、唱道(法門を演説すること)を
勤めた時、ただこの一句だけを言つて座より下りた。諸人は理解できず、ただ大
王のみが独り随喜したとある。この意味は、好かつた道(善道、人間界・天上界)
より生まれ来て今大王となり、善いことを行うと、「この世を」去る時も善で

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

王トナリ、修善スレハ、去ムトキモ善ナルヘ（三二b）シトナリ、乘^{シヤクセル}如^ニ実道^ニ来^ル成^ニ正覚^ヲノ心ナリ、造寺写経モ只世間ノ屋宅ノ如ク思、文字ノ如ク心得テ、タトヘハ仏寺ヲモ建立セム果ハ誠ニ小果ナルヘシ、厨庫山門ヲ光明ホトニ心得テ、造堂起塔セムハ、其果又実相ナルヘキナリ、師答云、廓然無聖^{クワツクニム}ト云ハ、此無聖ハ淨智妙円、体自空寂ノ聖諦第一義ト云時ハ、聖トモ凡トモアクヘカラス、故ニ無聖ト云フ、対^シ朕者誰ソト云ハ、師ヲ聖ト思フユヘカ、第一義ノ上ニ師ヲ聖トモ云ヒカタン、ユヘニ不識ト云フ、帝不^レ領悟^セ機不^レ契^スナリ、（三二a）

抑^レ初祖ト梁武ト問答ノ間、不審^{モツハラ}專^ココレアリ、初祖印度ヨリハシメテワタル、ナニトシテ言語通シテ問答アルソヤ、尤

あろうというのである。「如実の道に乗じて、来つて正覚を成じる」という意味である。「造寺・写経」も、「寺を」ただ世間の屋宅のように思い、「經典の文字を世間の」文字のように理解して、たとえば仏寺を建立する果はまことに小果であろう。厨庫・山門を光明ほどに理解して、造堂・起塔するのは、その果はまた実相であろう。師、答えて曰く、「廓然無聖」というのは、この「無聖」は「淨智妙円、体自空寂」（淨智妙円にして、体自ずから空寂なり）の「聖諦第一義」というときは、聖とも凡ともあげることができない。ゆえに「無聖」と言う。「対朕者誰」（朕に対する者は誰ぞ）と言うのは、師を聖と思うためか。第一義の上で師を聖とも言うことは難しい。故に「不識」と言う。「帝不領悟機不契」（帝、領悟せず、機契わず）である。

「経書、（いく十巻といふことをしらず、この経）いく百偈・いく千言としらず」というのは、諸法実相を一句とすると、諸法の上において、「いく万偈としら」ないようなものである。この理由である。

「そもそも、初祖と梁の武帝との問答の間は、全く納得がいけないことがある。初祖がインド（中天竺である）から初めて渡つて来た。どうして言語が通じて問答があるのか。非常に疑わしい。その上、石門の『林間録』には、「使達磨不通

有^レ疑、其上石門林間録ニハ、使^ム達磨^ヲ、
不^レ通^ニ方言、則何^{ナリ}於^ニ是時^ニ便^ニ能^ク
爾耶^トアリ、実ニモウタカハシキナリ、
タ、シ証果ノ聖者ハ、天上ニモ人間ニ
モ、其土ノ香ヲカクニ、言語皆通シテ
無^レ有^レ疑トイフ説コレアリ、(三二b)
又林間録ニハ、コトノ道理大スカタヲノ
スト云ヘトモ、梁武ト初祖ト、イカナル
通路アリケムモシリカタシ、一向疑ヲノ
コスヘカラス、

二祖正宗普覚大師、

名利ハ夢幻空花ト学スル事ナカレ、衆
生ノ如ク学スヘシ、

三施無福ト云ハ、施兵具、施毒藥、施女
人^{依^レ嬌色}、名利ハ夢幻空花ト学スル
事ナカレト云ハ、名利ハ実ナキ物ソ、夢
ソマホロシト思ヘ伝ニハアラス、名利
ハ名利ナリ、タ、シヤカテ名利ノ上ニテ
コソ名(三三a) 利ヲ解脱スレ、イタツ
ラニ夢幻空花ト思ヘトニテハナシ、

第三十一祖真丹第四祖大医禪師、

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

方言、則何於是時、便能爾耶(達磨をして方言に通ぜざらしめば、則ち何んぞ是の時
に於いて、便能くしかあらんや)とある。まことに疑わしいのである。ただし、
修行の結果証を得た聖者は、天上でも人間でも、その土の香りを嗅ぐとき、言語
は皆通じて疑いが無いという説がある。また『林間録』には、ことの道理、大姿
を載せると言うけれども、梁の武帝と初祖と、どのような通路があつたのかも知
ることは難しい。全く疑いを残してはいけない。

第二十六段

二祖正宗普覚大師。

「名利は夢幻空華なりと学することなかれ、衆生のごとく学すべし」。

三施無福というのは、施兵具、施毒藥、施女人(嬌色に依つてこれを与えること
である)。「名利は夢幻空華なりと学することなかれ」というのは、「名利」は実
体のないもの、夢、幻と思えというのではない。名利は名利である。しかしなが
ら、ほかならぬ名利の上で名利を解脱する。わけもなく「夢幻空華」と思えとい
うことではない。

第二十八段

第三十一祖(真丹第四祖)大医禪師。

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

今師ノ入滅ノ後（七）後（塔戸）自然開（儀相）如（生）ナルユヘニ、生
 次年塔戸開 儀相如（生）ナルユヘニ、生
 者必滅アリ、滅者無思覺ト知見スルハ小
 見（二）、生者ノ滅ナキモアリ、滅者ノ有思
 覺モ有ナムト、証拋ヲ引テ云ニハアラ
 ス、此証ハ只一度希代例（一）、人別不
 可然、仏法ニハ生也全機現、死也全機
 現ト談スルタケニテ心得（一）、滅ト云ハ凡
 悩（一）、死ト心得ヘカラス、滅トハ仏ノ涅
 槃ニコソ心得合ヘケレ、無思覺有思覺ノ
 （三三 b）有無ハ、仏性ノ有無ナルヘシ、

長慶（ケイ）慧稜和尚、

疑滯ヲ疑滯トセルコト三十年、サシヨカ
 スト云ハ、疑滯ノアヒタ三十年（一）、ウチ
 ヲカサル行持（一）、

芙蓉山（カイン）楷祖、

遇（コ）声（イ）遇（シ）色（ワ）、如（ル）石上裁（カ）華（ツ）ト云ハ、声
 色（二）不（レ）被（レ）礙（コ）、チナリ、

若得（一）心中無事、仏祖猶（二）是（レ）冤家（三）、無事ハ
 仏法（一）、仍得（二）仏法（一）ヌレハ、何事（一）ヲカハ

今、師の入滅の後（永徽）二年（閏）九月四日、世を逝る。翌年、四月八日、塔の戸、自然に開く。儀相は生けるが如し。……。次の年、塔の戸が開き、姿形は生きているようであるから、「生者かならず滅あり（と見聞するは小見なり）」「滅者は無思覺と知見せるは小聞なり」。「生者の滅なきもあ」り、「滅者の有思覺」も「ある」などと、証拋を引いていうのではない。この証は、ただ一度、代にもまれない例である。各人がそうではない。仏法では「生也全機現、死也全機現」と説くほどにして理解するのである。滅というのは煩惱である。死と理解してはいけない。滅とは仏の涅槃によつて理解すべきである。「無思覺」「有思覺」の有無は、仏性の有無であろう。

（第三十段）

長慶慧稜和尚。

疑滯を疑滯とせること三十年、さしおかず」というのは、疑滯の間が三十年である。「疑滯を」そのままにしておかない行持である。

（第三十二段）

芙蓉山の楷祖。

遇声遇色、如石上裁華「（声に遇い色に遇うも、石上に華を裁うるが如し）」といのは、声色に礙えられない意味合いである。

「若得心中無事、仏祖猶是冤家」（若し心中の無事なることを得ば、仏祖も猶是れ冤家（うらんでいる人）なるが如し）。「無事」は仏法である。よつて、仏法を得たな

行セム、ユヘニ冤家ノコトシト云、
(三四 a)

華^{ハナハ}解^{トク}笑^エ、鳥^{トリ}解^{トク}啼^イ、木馬^{キバ}長^{ナガ}鳴^ネ、石牛^{シキウ}善^ニ走^ハ、天外^{テンガイ}之^ノ青山^{シヤン}寡^カ色^{シキ}ナムト云ハ、
是ハ皆悟道ノ上ノ詞、花^{ハナ}ノエミ、鳥^{トリ}ノ
ナクハヨノツネ、木馬^{キバ}ハイカ、長^{ナガ}鳴^ネ
シ、石牛^{シキウ}ハ争^{マカ}ハシルヘキナムトハ心得^{ココロエ}マ
シ、花^{ハナ}ノエミ鳥^{トリ}ノ鳴^ネモ、木馬^{キバ}等^トノ鳴^ネモ同
ク心得^{ココロエ}ヘシ、ステニ天外^{テンガイ}ノ青山^{シヤン}トイフ、
陰陽^{インヤウ}ノ外^ノナルヘシ、

道^{ミチ}我^ガ四^シ事^ジ具^ク足^{トク}、方^{カタ}可^カ発^{ハツ}心^{シン}ト云ハ、道^{ミチ}
ハ衣食^{イジキ}住^ヂナムト具^ク足^{トク}シテヲコナハルトイ
フハ、手脚^{テヲ}ハヤカラストサクルナリ、
夕^{ユフ}、身命^{ミナト}ヲ、シマス、衣食^{イジキ}ヲ思^{オモ}ヘカラ
ス、(三四 b)

洪州江西開元寺大寂禪師、
勸^{カナレ}君^{キミ}莫^{ナシ}婦^{メウ}郷^{キョウ}、○説^{トク}汝^ニ旧^{コノ}時^{トキ}名^ナ、夕^{ユフ}トヘ
ハ勸^{カナレ}君^{キミ}莫^{ナシ}婦^{メウ}三^{サン}界^{カイ}ト可^カ心得^{ココロエ}、並^ト舍^{シヤ}老^{ラウ}
婆^ハ子^シ、説^{トク}汝^ニ旧^{コノ}時^{トキ}名^ナハ、三^{サン}界^{カイ}ヲ三^{サン}界^{カイ}ト、

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

らば、何事を行じよう。「何も求めるものはないのだから」故に「仏祖も」「冤家
の如し」というのである。

「華解笑、鳥解啼、木馬長鳴、石牛善走。天外之青山寡色」(華は笑むことを解
し、鳥は啼くことを解し、木馬は長く鳴き、石牛善く走す。天外の青山色寡く)などとい
うのは、これは皆悟道の上の言葉である。華が笑み、鳥が鳴くのは世の常であ
る。木馬はどのように長く鳴き、石牛はどうして走ることができようかなどとは
理解するな。華が笑み、鳥が鳴くのも、木馬等が鳴くのも同じに理解すべきであ
る。既に「天外之青山」とある。陰陽の外(というように)、相反するものを越え
ているのである。

「道我四事具足、方可発心」(道、我れは四事(飲食、衣服、臥具、医薬)具足して、
方に発心すべし)というのは、道は衣食住などが十分備わつて(それから)行わ
れるというのは、「私の」手脚(のふるまい)は「仏弟子のように」速くないと
「して、発心を」避けているのである。ただ身命を惜しまず、衣食を心配しては
ならない。

〔第三十三段〕

洪州江西開元寺大寂禪師。

「勸君莫婦郷、(婦郷道不行、並舍老婆子)説汝旧時名」(君に勧む、郷に帰るこ
と莫れ、(郷に帰らば、道行われず、並舍の老婆子)汝が旧時の名を説かん)。たとえ
ば、「勸君莫婦三界」(君に勧む、三界に帰ること莫し)と理解すべきである。「並舍

クト可_レ心得、莫_レ婦郷ノ莫_レノ字ハ、諸悪莫_レ作ノ莫、莫_レ妄想ノ莫_レト心得ヘシ、婦郷ノ詞ハ、海ヲトクニ不_レ宿死屍ト云程ノ詞ト可_レ心得、説_レ汝旧時名トハ、今ノ仏道ニ入_レ心地アルヘシ、婦郷ハ道不行トハ、道不行ノ所、故郷ナルヘシ、東西南北ノ婦去来、自己ノ倒起ナリ、然而ステニ向_レ南行スルトキ、大地同_レ向_レ南行スルト云フ、此_レ心地ナルヘシ、道不行莫_レ婦郷ナル（三五a）ナリ、道不行ハ大海不_レ宿死屍ノコ、ロナルヘシ、

漢州ニ向_レテ一步ヲアユマスト云フ、漢州ニ向_レ何ノトカ、アルヘキ、漢州ノ全体ハ馬祖ノ身トモ云ヘシ、

江西ニ一住シテ、十方ヲ往来セシムト云フ、漢州ニ不_レ向_レ程ニテハ、十方往来如何、但_レ道場ヲ不_レ起シテ、威儀ヲ法界ニ遍スト云フ事有、一語トハ即_レ心是仏、

先師天童和尚、

老婆子、説_レ汝旧時名」は、三界を三界と説くと理解すべきである。「莫_レ婦郷」の莫の字は、「諸悪莫_レ作」の莫、「莫_レ妄想」の莫と理解すべきである。「禁止の意を示すのではない。郷に帰ること莫_レし。尽十方世界がその人であるから。」「婦郷」の言葉は、海を説くときに、「不_レ宿死屍」というほどのことばと理解すべきである。「海は死屍を宿さないから、海だけであるように、婦郷の時も帰る人もいなくて、郷（尽十方世界）のみである。」「説_レ汝旧時名」とは、今の仏道に入る意味合いがあるはずである。「婦郷は道不行」（道は行われない時がないので道不行）とは、道不行の所が故郷であろう。「東西南北の婦去来」が「自己の倒起」（自己の中での倒れたり起きたり）である。そうであるから「向_レ南行するとき（は）、大地おなじく向_レ南行する」とある、この意味合いであろう。「道不行」が「莫_レ婦郷」であろう。「道不行」は「大海不_レ宿死屍」の意味合いであろう。

「漢州にむかひて一步をあゆまず」とある。漢州に向かうのにどのようなことがあるのだろうか。漢州の全体は馬祖の身とも言うべきである。

「江西に一住して十方を往来せしむ」とある。漢州に向かわない時で、十方往来はどうか。ただし、道場を起ささないで、威儀を法界に遍ずということがある。「一語」とは「即_レ心是仏」である。

（第三十五段）

先師天童和尚。

〔仏法那得他手裏有〕ト云ハ、光仏照ニ仏法アルコト得ムヤト云ナリ、此坐破ト云詞、只ナヘテノ蒲団ヲシキ損ムコトキハ(三五b)ヤフルヘカラス、タトヘハ解脱ノ心地歎、仏ノ正覚ハ金剛座ノ上ニテ正覚スル、ソノ心地歎、

行持上下帖之間、所レ被レ載之祖師、自レ仏至三童和尚三十四祖、但弘覺大師兩所入レ之、一所ハ寰中ノ説得一丈、不如行取一尺ノ詞ノ篇ニ入、洞山悟本大師、同入レ之、不レ被レ入三行持篇、然者三十二祖也、(三六a)

〔仏法那得他手裏有〕(仏法那ぞ他が手裏に有ることを得ん)というのは、「光仏照」(仏照徳光)に仏法がありえようかというのである。この「坐破」という言葉は、ただ普通のふとんを敷き損なうようなことは、破ることが出来ない。たとえば、解脱の意味合いか。仏の正覚は金剛座の上で正覚するのである。その意味合いか。

行持上下の巻の間に、載せられるところの祖師は、「釈迦牟尼」仏から天童〔如浄〕和尚に至る三十四祖である。ただし、「雲居山」弘覺大師は二箇所に入っている。一箇所は〔第十七段の大慈〕寰中の「説得一丈、不如行取一尺」の詞の篇に入れ、洞山悟本大師も同じくここに入れる。行持の篇に入れられない。そうすれば三十二祖である。

(1) 底本の泉福寺本は「是等ヲハ正境ユツリテ」である。玉林本、万福寺本(行持の巻は欠落のため、忠実な模写本である大堂異麟書写本による)、寛政五年書写本は「是等ヲハ聖境ニユツリテ」としている。原文は改めないが、「正境」は「聖境ニ」の意味に理解し、訳した。

(2) 「口は説黙、身は行、意の止観」は『摩訶止観』卷二上で説く、「身の開遮、口の説黙、意の止観」に相当するであろう。『摩訶止観』では、常坐、常行、半行半坐、非行非坐の四種の三昧が説かれる。初めに、それぞれがどのような方法かが説かれ、次にこの修行を勧める理由が示される。方法については、例えば常坐三昧では次のように説かれている。

一常坐者、出文殊説文殊問兩般若、名為一行三昧。分初明方法、次明勸修。方法者、身論開遮、口論説黙、意論止観。(正蔵四六・一一a、b)

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

この後、その一つ一つについて詳説される。常行三昧、半行半坐三昧（方等三昧、法華三昧）についても同様に説かれる。

(3) 『妙法蓮華経』方便品。

十方仏土中、唯一乘法、無二亦無三、除仏方便説。（正蔵九・八a）

(4) 『船筏』は『道元和尚広録』巻八、永平禅寺語録法語において、悟を待つことを原則としている諸宗の坐禅の譬えとして、次のように用いられている。

此坐禅也、仏仏相伝、祖祖直指、独嫡嗣者也。余者雖聞其名、不同仏祖坐禅也。所以者何、諸宗坐禅、待悟為則。譬如仮船筏而度大海、將謂度海而可抛船矣。吾仏祖坐禅不然、是乃仏行也。（道元全下・一六一頁）

仏祖の坐禅は、船筏で譬えられるような、悟を得るための手段としての坐禅ではないから、船筏も必要としないのである。

(5) 『正法眼藏諸惠莫作』。

いはゆる、七仏の法道、かならず七仏の法道のごとし。相伝相嗣、なほ簡裏の通消息なり。すでに是諸仏教なり、百千万仏の教行証なり。（道元全上・二七七頁）

(6) 『妙法蓮華経玄義』巻九下（正蔵三三・七九四b）。『法華玄義』は「普賢観云」としてこの句を引く。「普賢観」とは『仏説観普賢菩薩行法経』のことで、ここでは次のように説いている。

汝今応当観大乘因、大乘因者諸法実相。（正蔵九・三九二b）

(7) 空華乱墜のように理解すべきであるとは、『空華聞書』のように理解すべきと言っているのであろう。

帰宗云、一翳在眼、空華乱墜、世間ニハ病目ニアレハ空華乱墜ストココロウ、今ハ不可然、翳モ仏ノ病ナルベシ、眼モ仏眼ナルベシ、花モ乱墜モ皆仏也、全機ナリ。（正法蒐一・一六八a）

(8) 『妙法蓮華経』巻二、葉草喩品。

雖一地所生、一雨所潤、而諸草木各有差別。（正蔵九・一九b）

(9) 『正法眼藏坐禅箴』に引かれる宏智正覚の『坐禅箴』中のことは、照と言えば、照らすもの（能縁・主観）と照らされるもの（所縁・客観）とをわけて説くが、道元禅師は、

不对縁を照とす。照の縁を化せざるあり、縁これ照なるがゆゑに。（道元全上・九八頁）

と述べており、『聞書』は、

不対縁ナルヲ、ヤカテ照ト云ヘシ、(正法蒐一一・五八四a)
とする。

(10) 『妙法蓮華經』卷四、五百弟子授記品の衣裏繫珠の譬喩のことと思われる。「行持」の巻は、この譬喩を用いてはいない。

(11) 『妙法蓮華經』卷二、信解品の長者窮子の譬喩を指すものと思われる。

(12) 「衣の内に繋げる」のは、親友の無価の宝珠であつて、「真父の珠」ではない。『聞書』は、衣裏繫珠の譬喩と長者窮子の譬喩を
ごた混ぜにして解釈している。

(13) 『道元全 上』は「回」とするが、これは「回」の古字。回回は「①めぐりめぐる②光りかがやくさま」(『大漢和辞典』)の意
味。欄外に「所ニテ此字ソソセリ、廻廻」とある。「廻」は「①とおい、はるか②ひかる」の意味。『大漢和辞典』には「廻廻」
は「遠いさま」とある。露回回は、ありありと現れているさま。

(14) 西晋の王康琚の反招隱詩に「小隱隱陵藪、大隱隱朝市」とあるが、『聞書』が引用するものとは小隱が一致しない。

(15) 『大方広仏華嚴經』卷五(正蔵九・四二九a)。

(16) 『摩訶止観』卷一上(正蔵四六・三a〜b)。

(17) 『金剛般若波羅蜜經』。

仏告須菩提、爾所国土中所有衆生若干種心如來悉知。何以故、如來說諸心皆為非心是名為心。所以者何。須菩提、過去心不可
得、現在心不可得、未來心不可得。(正蔵八・七五一b)

(18) 『天聖広燈錄』卷八、南嶽懷讓章。

乃直詣曹溪礼六祖。祖問什麼處來。師云、嵩山安禪師處來。祖云、什麼物与麼來。師無語。經于八載。忽然有省。乃白祖云、
某甲有箇會處。祖云、作麼生。師云、説似一物即不中。祖云、還仮修証也無。師云、修証即不無、不敢汚染。祖云、祇此不汚
染、是諸仏之諸念。吾亦如是、汝亦如是。(統蔵一三五・三二五c)

(19) 『嘉泰普燈錄』卷三、長水子瞻章(統蔵一三七・三八b〜c)。『正法眼蔵谿声山色』(道元全 上・二一八頁)、『永平広録』卷
九、玄和尚頌古第四六則(道元全 下・一七六頁)にもある。

(20) 「那」は「耶」の誤り。訳文では改めた。

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

(21) 出典不詳。

(22) 『正法眼藏』本文は「使」であるが、『聞書』は「便」とする。引用している『林間録』は「便」を用いている（統藏一四八・二九七c）ので、訳文ではそのまま「便」を用いた。

(23) 『聞書』の本文に「七年」とあるのは誤り。『正法眼藏』の本文には「高宗永徽辛亥歲閏九月四日」とある。「永徽辛亥」は「永徽二年」であるから、訳文では「二年」に改めた。

(24) 『聞書』の本文に「見」とあるは、「聞」の誤り。訳文では改めた。

(25) ここでは、第十七段の大慈寰中の段は、寰中の「説得一丈、不如行取一尺」の「詞の篇」とし、第十八段の洞山悟本大師の段と第十九段の雲居山弘覚大師の段は、寰中と同じように説と行について述べているので「詞の篇」に入れて、「行持の篇」には入れられないとするのである。洞山悟本大師は第七段で、雲居山弘覚大師は第八段で行持については触れているので、重複して取り上げており、三十四祖から重複の二を引くと三十二祖となるのである。